

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	朝の会議と午後の引継ぎ、毎月の職員会議等で日々のケアを話し合い職員の意識合わせや確認を行っている。管理者は日々の様子を視たり、毎日リーダーから報告を受けながら理念の実践に向け助言している。	「安心して暮らせる居場所作りのサポーター」など誰にも解る三つの理念が掲げられている。玄関やユニットの掲示板、キッチンの壁にも張られており、来訪者等にもわかり易くなっている。毎月第一週に行われる職員会議等でもお互いに確認し合っており、職員の聴き取りでも理念を実践している具体的な場面を上げることができ、浸透していることが窺い知れた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	社会福祉協議会と連携し資源を活用しながらホームを開放している。理科大学生や高校生の実習現場として受け入れを続けている。歌、踊り、楽器の演奏など習い事の発表場所としての訪問や見学に訪れる数も増えており住民との交流の機会は多くなっている。	ホームの所在地が二つの自治会に跨っているが、折にふれ協力関係を保つようになっている。年2回カラフルなカーネーションを持参していただく方や尺八、テナーサックスなどの楽器演奏のボランティアの来訪もある。高校生や大学生などの職場体験や実習も受入れている。冬場にはホームの広いロータリーにイルミネーションが飾り付けられ夕方散歩する地域の人々にも恒例の催しとなり、通りすがりの車窓からもその幻想的な光を楽しむことができる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「認知症の人と家族の会」の冊子を参考に家族会との勉強会を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	家族会代表、市の介護保険課等の意見を聴きサービスの向上を図っている。自己評価、外部評価結果も会議で報告している。	会議の開催予定は年間で立てられており関係者に事前配布している。入居者や家族代表、区長、市担当課職員、地域包括支援センター職員などが出席し2ヶ月に一回開いている。会議ではホームの活動報告や市からの要望等があり相互に意見交換をしている。出された意見・要望などは職員会議で報告されている。自己評価、外部評価結果も会議で報告している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の担当者が入れ替わると気楽に話し合うことが難しい場面がある。	市の担当部署には何か不明なことや困ることがあれば出かけて行き相談している。市派遣の介護相談員が毎月二回訪問しており、入居者の話し相手になったり相談にのっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の弊害について職員がよく理解している。	内部研修が行なわれており、職員も身体拘束については正しく理解している。やむを得ない事情で職員の手が足りない時は安全上玄関に施錠することはある。見守りに対応しているので拘束を必要としていない。外出傾向の方が若干名いるが、中庭に出たり、職員が付き添うなど気分転換を図っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待についての職員研修を開き、身体拘束廃止について話し合いをしている。		

グループホームすずらん・鈴棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護、成年後見制度について研修会を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所改定時に十分な話し合いを行い、理解、納得を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会を通じ意見を集約し、それらを運営に反映している。	ホームからも家族等に呼びかけ、月に1回は来訪していただいている。家族会があり年1回総会を開いており、必要に応じ臨時に開催することもある。その様な機会に家族等は要望や苦情などを直接職員に話しをしている。出された要望や意見は全職員で話し合い、運営に活かしている。コミュニケーションを円滑にする手段として手書きの「すずらん通信」が3ヶ月ごとに発行され、日常活動を綴った入居者別の便りとともに家族のもとへ送付されている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月一回の職員会において、意見や提案を聴く機会を設けている。	毎月第一週に職員会議が開かれている。全職員参加のもと研修報告や内部研修等も交え、意見交換がされている。2~3か月に一度、ホーム長が職員をレストランやゲーム、カラオケなどに誘い、職場を離れての意思疎通も図っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者が必要に応じて個々の職員と食事会を行い、本人の希望等を取り入れるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修会には積極的に参加させ本人の技能等の向上を図っている。また日本福祉大学への入学を積極的に薦めている。現在二名在学中である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修会等で知り得た友人と積極的に交友関係を育んでいる。また双方とも施設を訪問しあっている。そして介護技術の向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前に事前に本人等に施設を見学していただき本人と話し合いを行っている。 最低三回以上は行う。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人入所前に家族等にホームを訪問していただき話し合いを行い、要望等を聴いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	介護支援専門員が本人と家族等から意見を聴き、支援の方向性を見極め、その後その情報をフィードバックしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者個々の生活歴や出来ること、得意なことを職員は熟知している。得意分野で力を発揮することで生活への張りや生き甲斐につながるように職員は個別サービスの支援を行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族会等を通じて家族同士の融和を図りつつ本人を支えていく関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	隣組友人等のホームへの訪問を積極的に支援している。	隣近所の方や小学校の同級生の来訪を受け居室で歓談する入居者がいる。家族と共に馴染みの美容室へ出掛ける方もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	鈴棟、蘭棟の相互の交流を行い、楽しい生活の場を提供するように努めている。		

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族会等を通じホームから他の施設へ移動した入居者について訪問等を行い、家族等とも連絡を取り合っている。	
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人と時間をかけて話し合い、意向の把握に努めている。	入居前に入居希望者に3回以上ホームを見学してもらい、お互いに納得した上でサービスの利用が開始できるようにしている。現在の入居者の殆どが自分の意向を表すことが出来、職員との信頼関係から心を開き、わがまとも思えるようなことを洩らす場合がある。若干名の方については表出が難しい時もあるが家族から聞き取った生活暦や仕草から思いを推し量っている。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族等から必要な情報を提供してもらい経過等の把握に努めている。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員研修会を行い一人ひとりの心身状況等の把握に努めている。	
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアに見直しについての会議を行い、介護支援専門員が必要な情報を報告し家族等からサインをもらっている。	一ヶ月毎に各ユニットの担当職員を替えており全職員が入居者の状態やケア計画を把握している。朝会等で職員の意見を聞き計画作成担当者が一ヶ月ごとに介護計画を見直している。作成された介護計画については入居者や家族に説明しており、家族からは手厚い介護計画への恐縮の言葉と同時に感謝の言葉をいただくことがある。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日朝、夜、職員会で情報を共有し見直しに活かしている。	
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	必要な範囲でリハビリ等を行っている。	

グループホームすずらん・鈴棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者本人、家族等の意向を踏まえ他の施設への転換も図っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所時にかかりつけ医との面談を行い、医療についての認識を深めてもらっている。また、掛かりつけ医とは二十四時間体制で臨んでいる。	主治医については入居者や家族の了承を得て協力医に変更している。月1回、第4週の木曜日に協力医による往診もあり、入居者の急変時や負傷などで治療が必要になった場合には24時間連携し必要な支援が受けられるようになっている。准看護師も常駐しており医療機関と連携をとりながら対応している。職員の中には歯科衛生士の資格者もあり口腔ケアにも留意している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ホームの看護師、担当医に必要な応じて情報を提供している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院、ケースワーカー等との情報交換や相談に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	「終末期の意向確認書」及び「事前指定所」等により、家族との話し合いを行っている。	重度化した場合や終末期に関しては意向確認書を入居者家族等から頂いている。医療や看護が必要となる直前までホームで暮らす方もおり、また最期までホームのサービスを受け続けたいと希望する入居者・家族も多く、本人や家族との話し合いの中で事前に希望する搬入先医療機関を決め、安心して納得して過ごしていただけるよう支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	広域消防による「応急手当講習会」や、かかりつけ医による初期対応についての勉強会を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域消防署等との連携を図り、訓練等を行っている。	消防署や地域の消防団の指導を受けながら年1～2回の消防訓練、避難訓練を実施している。今年度は予告なしのホーム内での緊急避難訓練を実施し、入居者も含め3分ほどで全員避難を完了した。夜間は2時間毎に巡回を行い入居者の介護とともに安全確保にも努めている。自動火災報知器は既に設けられており、スプリンクラーも平成22年度中に設置される予定である。	総合防災訓練として春、秋の2回、地域の運営推進会議のメンバー等にも参加を促し実施していただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉掛けには必要以上の注意を行い、優しい言葉掛けを心掛けている。	個人情報保護に関する研修が毎年実施されておりマニュアルも整備されている。秘密保持の徹底も図られており職員にも浸透している。入居者への呼び掛けも「〇〇さん」で統一し、人生の先輩である入居者一人ひとりの生活暦や立場を考え、誇りやプライバシーを損ねない対応をしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	傍に寄り添い入居者本人とじっくり時間をかけて話し合う機会を設けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	なるべく希望に沿うように努力している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	管理者が積極的に支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者と職員が共同して楽しく関わっている。	自力で食べられる方が殆どで一部介助の方が若干名いる。食形態も粗キザミの方が若干名いるが常食の方が殆どである。職員も食事中はお茶をすすめたり料理の味を聞いたり、楽しみながら食事ができるように努めていた。配膳や下膳、食器洗いなど意欲的に加わる入居者の姿も見る事が出来た。家族からの差し入れの野菜やホームの畑で育てたカボチャ・ゴーヤなどが食卓に上ることもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々に入居者の状況に応じて支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔状態の確認をしている。		

グループホームすずらん・鈴棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	おむつの使用を減らすように心掛けている。	介助を必要としない自立の方が数名いるが、失敗をしてもできるだけオムツにたよらないように排泄パターンに沿って誘導している。冬場は安心のためリハビリパンツとパットを使用する方もいる。居室へのポータブルトイレの持込は全くなく、昼食後、リズムに合わせて手つなぎで誘導する職員の姿を見ることができた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事及び運動について、その予防に取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	希望に応じて行っている。	ユニット毎に入浴日が決められている。夏場はシャワーや清拭等に対応することもある。体調の整わない入居者には職員二人で介助する場合もある。入浴を嫌がる方には無理強いせず、時間をかけ納得していただけるよう言葉掛けしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の意思を尊重するように努力している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎日の引継ぎについて確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	職員等と買い物に出て気分転換を図ったり、職議会を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	月一回、戸外に出掛けている。	ホームの周りを毎日散歩したり、食材の買出しも兼ね買物に交代で出掛けている。お弁当持参でのお花見や3~4人の小グループでの外出に出掛けることもある。天気の良い時にはパラソルの置かれた広いウッドデッキでお茶を飲んだり昼食をとることもあり、ピクニック気分を楽しんでいる。	

グループホームすずらん・鈴棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の要望により、お金を所持したり使えるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	管理者が手紙作りを積極的に行い、また家族等との専用電話により、いつでも自由に話ができるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	生活観、季節感は随時取り入れている。	食堂やソファのあるリビング、畳敷きの小上がり、広い廊下などユッタリとしたスペースが確保されている。天窓からの採光や床暖房、エアコン、換気用の循環システムなど快適な環境づくりがされている。廊下には2畳ほどの畳敷きの空間があり、洗濯物をたんだりベンチ代わりに利用されている。庭の一角に設けられたウッドデッキでは日向ぼっこしながら歌ったり、お茶を頂くなど憩いの場となっている。食堂の大きな窓からは四季折々の景色を眺めることが出来、入居者、職員の会話が弾んでいた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳コーナー等を設け、ゆっくり話し合いが出来る場所を提供している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の協力の下、本人の希望を取り入れている。	居室の入り口にはホーム長手作りのキルトの表札が掛けられている。居室にはベッド、クローゼット、洗面台が備え付けられている。居室内は清潔で整理整頓がされており、小さな筆筒や小物入れ、ぬいぐるみなどが置かれている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自立生活に向けて工夫している。		